



図4 鉄製品群平面図(S:1/15)

#### (6) 墓壙内西部の鉄製品群

南北第2サブトレンチにおいて西壁際を精査していたところ、現地表から約10m下で数点の鉄製品が出土した。竪穴式石室から明らかにはずれたこの地点から鉄製品の出土をみたことは、まったく予想していなかった事態であった。そのため、急遽調査方針を再検討し、範囲確認をおこなうことにした。最終的に、墓壙西壁の上端から2.3m東、墳丘主軸から南北とも1.25mのほぼ長方形の区画に広がる長さ2.5m、幅0.25mの鉄製品群を検出した(図2)。

鉄製品群は上面に連なる刀剣と、その下面の農工具および石製模造品で構成される(図4)。

**上面** 上面の刀剣は、刀15点・剣5点で、すべて切先を南に向け刃を寝かせた状態で出土した。刀1点以外は、鞘や柄の木質が非常に良好に遺存している。上面の高低差は6cm以内におさまり、ほとんど水平といえるが、一部の刀は明らかにほかの刀剣の上に置いてある。

配置の仕方は、切先の位置などからだいたい7群に分けることができそうである。各群は2～4点で構成される。微妙に角度を変えながらジグザグ気味に直列している。刀のみの群と刀剣双方を含む群とがある。

**下面** 下面の農工具および石製模造品は上面のように広がっていない(裏表紙)。長さ30cm、幅12cmほどの範囲に、鉄製農工具として鎌・斧・柄付斧・刀子・蕨手刀子、石製模造品として鎌が上下に集積して出土している。直接の証拠はないものの、おそらく箱か袋の中におさめられていたと推測している。

集積の状況を簡単に記すと、上から順に、刀子・斧、柄付斧・鎌など、刀子・斧・鎌形石製模造品といった、おおよそ3面で構成されている。出土遺物の項で後述するように、いずれも小型品であり、最上面から最下面までの高低差は数cmにすぎない。

**赤色顔料** 鉄製品群の西に接して赤色顔料が線状に分布していた。鉄製品群の性格と密接に関わると予測されるが、赤色顔料の範囲を確認するような調査は今回おこなわなかった。(魚津)

## 2. 後円部墳丘の調査 第7次

### (1) 17トレンチ(拡張区)

第6次調査の際に17トレンチ北端で検出した石列の性格を解明するため、第7次調査では拡張区を設定して調査した。その結果、拡張区のほぼ全面にわたって墓石を検出することができた。従って、この石列は後円部3段目斜面墓石の端部を示すものであったことが判明した。

墓石の残存状況は非常に良好で、ほぼ当時の状況のままと考えられる。墓石は長軸20cm前後の角礫であり、長軸方向を墳丘に差し込むようにして、下から上へ、また北から南へと順に墓られている。墓石の範囲